

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：54301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02244

研究課題名(和文)雑誌メディアによる戦後日本の秘教運動の宗教史的研究 『日本神学』の変遷を追って

研究課題名(英文)Tracing the history of media-based esoteric movements in postwar Japan: The case of the journal *Nihon Shingaku*

研究代表者

吉永 進一 (Yoshinaga, Shin'ichi)

舞鶴工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：90271600

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：『日本神学』誌は、1949年に日蓮宗改革運動として発足し、1952年の万教一元同盟運動を経て、神道神学の確立を標榜し、さまざまな新宗教やオカルティズム運動を紹介する媒体となった。このため、戦前日本の精神療法、アメリカのオカルティズム、戦後の宗教間対話なども研究する必要が生じた。研究が拡散してしまったことは否めないが、精神療法、心霊研究、超古代史、万教帰一を含めた「日本のオカルティズム」というカテゴリーを検討する第一歩となった。創刊から1974年までの目次は作成が完了したものの、最終報告書の執筆には至らなかったのは残念であるが、基礎資料は整理できたので科研終了後もさらなる研究を進めたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1970年代以降、オカルトという語は流布しているが、1960年代までにも「オカルト」に対応する知識や運動が存在していた。昭和20年代に創刊された『日本神学』は、海外からのオカルティズム紹介が沈滞していたと思われる時期に、それらの紹介を行なっていただけでなく、戦前の超古代史や精神療法などを戦後に復興する役割も果たした。本研究によって、空白となっていた戦後のオカルティズム史を発掘することで、戦前から戦後への連続性を検証できよう。

研究成果の概要(英文)：*Nihon Shingaku* started in 1949 as the vehicle for the ideas of a reformist movement inside the Nichiren sect. It changed into a journal devoted to establishing a Shinto Theology, after the original movement crossed paths with the ecumenical movement called Bankyo Ichigen Domei in 1952. It then started introducing a variety of new religious and occultic activities in Japan and abroad. To trace the history of this journal, it was necessary for us to do research on pre-WWII psycho-spiritual therapies called "seishin ryoho", occultism in the US, and several post-WWII ecumenical movements. As our scope expanded, it became necessary to discuss the notion of "occultism in Japan" which includes "seishin ryoho", psychical research, pseudo-histories, syncretic religions and so on. It is regretful that we could not publish the final report, but all journal contents from 1949 to 1974 have been catalogued. We hope to continue our research on *Nihon Shingaku* and occultism in postwar Japan.

研究分野：宗教学

キーワード：日本神学 オカルティズム 日蓮宗 万教一元 中野文隆 関口野薔薇 吾郷清彦 藤井岐彦

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパではここ 20 年ほど秘教 (esotericism) あるいはオカルティズム (occultism) の歴史研究が盛んになっている。当初は西洋の地方的な現象として、オカルティズムは捉えられていた。しかし、アジア地域への西洋オカルティズムの流布やニューエイジ (あるいはスピリチュアル) 文化の広がりなどで、西洋秘教 (Western Esotericism) がグローバルな現象ではないかという提言がなされつつある。たとえば、秘教史研究者からは Egil Asprem, “Beyond the West: Toward a New Comparativism in the Study of Esotericism” *Correspondences* 2.1 (2014)、Wouter J. Hanegraaff, “The Globalization of Esotericism” *Correspondences* 3 (2015) があり、スーフィズム研究者の Nile Green も “The Global Occult: An Introduction” *History of Religions*, 54_04 (May 2015) を発表している。仮説からすでに検証の時期に入っているといえる。それを受けて、日本にも occultism という領域を設定するとすれば、どのような歴史的な連続性を持つ領域が設定可能かという問題が生じる。

もう一方、最近、欧米では近代ヨーガの歴史研究が進んでいる。従前のテキスト中心主義を脱して、プラクティスから宗教史をみなおし、さらに「伝統」の近代的構築についても見直しが進んでいる。

「オカルティズム」と「プラクティス」という二点から、日本の近代宗教史を考えた場合、まず目につくのは大正時代に隆盛を迎えた二つの霊的な運動 (民間精神療法、大本教を介して広まった鎮魂帰神の法) が注目に値するが、これらは戦後には歴史から姿を消している。そして 1970 年代からはじまるオカルトブームとの間、終戦後から 1960 年代にかけての空白地帯があると思われる。戦後オカルトと戦前オカルトの間の断絶と連続について検証することで、日本の近代オカルティズム史を構築するべき時に来ているのではないか。

2. 研究の目的

本研究では、1949 年に創刊され 2011 年まで誌名を変えつつ続いた、小規模のオカルティズム雑誌である『日本神学』誌に焦点を当て、海外のオカルティズム紹介と、日本の戦前のオカルティズムの復興に焦点をあてることで、戦前からの連続性をもったオカルティズム史の構築と、最終的には海外の秘教史研究者との意見交換を目指す。

3. 研究の方法

コリン・ウィルソン『オカルト』が邦訳され、「オカルト」という語が本格的に流行しはじめた 1974 年までの『批判宗学』『神霊文化』『日本神学』(同一雑誌) を対象にして、記事の目次と資料を共有し、中野文隆、関口野薔薇、藤井岐彦など何名かの主要人物の軌跡をたどる、また、戦前から同時代にかけてのオカルトの記事を調査、あるいは関連領域の研究者との情報交換を行う。

4. 研究成果

まず第一に、研究全体の過程についてまとめ、第二に『日本神学』の執筆者とその内容、そして第三に中心であった中野文隆について略述し、最後に「まとめ」を述べる。

(1) 研究過程と課題

1949 年から 1980 年までの『批判宗学』『神霊文化』『日本神学』のコピーを作成し、1949 年から 1974 年までの目次を作成できた。また、同時代の新聞雑誌の調査や、明治期の精神療法雑誌で、日本で最初のオカルト雑誌と位置づけうる『心の友』(1906~1912 年) の国会図書館所蔵分をすべて調査した。半公開での研究会は研究期間内に 5 回開催し、西洋秘教史、オカルト的話題に関する戦後マスメディアの動向、戦後オカルトの政治的立場などについての知見を広め、オカルト流行の陰画としてのカルト問題も視野に収める必要も生じた。

こうした研究の過程で、二つの新たな課題が浮上してきた。ひとつは、『日本神学』にさまざまな行法が掲載されていたことで、戦前の民間精神療法から戦後への連続性を検証する必要が生じてきた。2019 年に、研究分担者が多く参加して執筆された『近現代日本の民間精神療法』(国書刊行会、2019) が出版されたので、これを利用して議論を深めることとした。また、中野文隆は、後述のように日蓮宗のエリート一族の出身であり、また初期に影響を与えた今成覚禅も曹洞宗の僧侶であった。前者は法華系の行者との出会いにより、後者は万教帰一的な宗教観により、既成宗門から逸脱していったのである。これを研究するためには、宗門仏教内のプラクティスや万教帰一の方面からの検討が必要になった。

このように、研究を進めていく内に新たな課題が発掘されたために、一面ではまとまりにかけ、他面では添付のような多方面での研究成果も得られ、戦後オカルトを包み込む形でのさらなるプロジェクトの必要性が明らかとなった。残念なことに、2020 年に予定していた最終的な総括を行う研究会がコロナ禍のために中止せざるをえなくなり、中途半端な形でプロジェクトを終わらざるをえなかった。しかし、目次やデータ類などの基礎資料は共有されているので、終了後にさらなる研究を予定している。

(2) 執筆者と内容

編集作業は、編集発行の中心人物であった中野文隆が退職を勤めていた清水市(当時)三保に

ある日蓮宗寺院、妙福寺を拠点として行われた。1949年に創刊された当初は『批判宗学』と題して1951年まで続いた。この時期は日蓮宗革新運動の一端を担っており、そのために、「教学協同研究会」は発行元の名称として長く続くことになる。戸頃重基、中濃教篤、妹尾義郎なども寄稿しており、のちの『神霊文化』『日本神学』の自主憲法制定を基調とする政治姿勢とはまったく異なったものであった。その一方で、新宗教団体、紫光学苑を主宰する川上盛山も寄稿しており、その後の路線返還へとつながっていく。

1952年から1年間『宗教文化』と改題している。同年当初の第1号から、神道、仏教を超えた「日本神学」の確立が提唱され、同時に、世界の他宗教との提携と平和が謳われるようになる。福井市にあった曹洞宗寺院、孝顕寺の住職、今成覚禅が主宰する世界宗教文化協会と提携し、万教一元同盟運動を興している。この運動はまもなく今成覚禅一派との分裂にいたり、9号では中野、吾郷哲夫、藤井岐彦らの中核会員を中心に「日本神学連盟」の発足に至っている。

この時期、日本の宗教界では「宗教会議」は一種のブームとなっており、1946年に京都で開催された国際宗教同志会を嚆矢として、1954年から56年にかけては三五教主催による「世界宗教会議」が計8回開催され、1955年には中下弥三郎の提唱による「宗教世界会議」が開催されている。なお、三五教本部も旧清水市内にあり、二つの宗教間対話が並行して進んでいたわけだが、両者の間には直接の交流はなかったようである。

この改題後、次第にさまざまな「オカルト的」記事が誌面を飾ることになる。ひとつは長期にわたって連載された吾郷哲夫（清彦）による『上記』などの超古代文献の解説記事であり、道ひらき会の日立道根彦による竹内文献の記事なども掲載される。藤井岐彦は、宏曜、辰道、啓道などの筆名を使い分けて、心霊、占いなどの記事を執筆していたが、同人の中でも特に政治的発言が多い。富士山麓で1953年より三回ほど開催された「人類平和祭」を組織したが、1960年の安保時期には「日本民族会議結成の提唱」（『神霊文化』12巻7号）を提唱するなど、民族派の色彩をもっとも強く出していた。

海外記事では、長きにわたって寄稿していた関口野薔薇の貢献が大きい。彼は戦前からアメリカに移住し、カリフォルニア州でのヨーガやオカルト系のグルたちの教えを盛んに日本に紹介している。また関口と同様、アメリカに住んでいた石坂浦次郎は、科学的な理論を駆使して神道的世界観を構築している。元天行居の会員であった石川匡祐も、アメリカのオカルトに関する記事をいくつか寄稿している。このように、ほぼ同時代のアメリカの情報が誌面では紹介されていた。

中野文隆も義超などの筆名で盛んに執筆しているが、彼はインドネシアのスブドや日本の大元密教など様々な行法の実践記事や、フィリピンの心霊医師など霊能者などの紹介記事が多く、彼自身がさまざまな教えを転々としていたことがわかる。この点については次項に触れておきたい。

以上のように日蓮宗改革運動から、万教一元同盟という習合的な運動を経由して、戦前からの超古代史や心霊研究の復興、同時代のアメリカからのオカルト情報、神道系、密教系などの新宗教運動の紹介などが並ぶ、一種のアリーナであり、一般読者を得るには専門的すぎたにせよ、オカルト流行に先んじて、同様のカルト的場を構成していた。

(3) 中野文隆

中野文隆の生涯については、そのご子息で妙福寺現住職へのインタビューで以下のようなことが判明している。日蓮宗の本山、海長寺の六十一世中野日燦の息子として生まれる。中野家はもともとは江戸の刀鍛冶の家系で、日蓮宗僧侶を輩出しており、金子日威は中野の従兄弟にあたる。父親は近代日蓮宗の指導的な存在であった新居日薩の弟子として宗門の重要な寺院を転々とし、また荒行を何度かこなしているが、息子には日蓮宗の修法を学ぶことを禁じたという。中野は、地元の庵原中学（現、清水東高）を卒業後は立正大学に学ぶが、同時に写真専門学校にも通い、英字習字をよくするなど、器用な人物でもあった。

中野自身は『ヨーガ霊動法』（日貿出版社、1982）、『脱カルマ霊動法』（大陸書房、1988）に触れているように、この東京遊学時代、今木龍泉という法華経系の行者と出会い、さまざまな超常現象を経験したが、その中で「霊動」と呼ばれる身体の自動運動を経験してから世界観が転換したようである。彼はさらに神心光教という光信仰に基礎をおく習合神道的行者の山岡神龍とも知り合い、教学を学ぶと同時に、そのような民間信仰の世界にも身をおく。こうした素地の上で、戦後、寛克彦の『神ながらの道』に出会ったことが神道に深入りする契機になったという。

また、霊動体験を追求していく中で、インドネシアで発生し戦後まもなく日本に伝わったスブドやヨーガ、さらには戦前の有力な精神療法であった岩田式本能療法の系譜を引く、潮晃充の「自然良能誘起法」、あるいは石上神宮の鎮魂法などを遍歴して、霊動という実践面からの行法の総合的視座を構築しているのは重要な点であろう。ここでも興味深い点は、霊動という点では、本田親徳から長澤雄楯を経由して大本教、そして三五教に伝えられた鎮魂帰神の法がある。そして、長澤の神社、月見里神社と、三五教の戦後の本拠は、妙福寺から遠くない清水市内にあったにもかかわらず、それについては一切言及されていない。この空白は、かなり意味のあるものと思われる。

(4) まとめ

西洋オカルティズムの重要な特徴は、個物相互が見えない関係で感応しあう宇宙という生氣

論的あるいはアニミズム的宇宙観を、機械論的な科学的宇宙観とおりあいをつけながら語り直すことであり、たさまざまな思想とそれを保持する人間たちがゆるやかに社会的な場を構成することにある。『日本神学』は、石坂の科学的宗教論を端的な例とするが、宗門や宗教を脱してより広く宇宙に根拠を持つ神学の構築を目指したことから、そうした構造的な類似を備えたという点、さまざまな論者の意見交換の場となっていた点で、オカルティズムの特徴を満たすものであり、また関口野薔薇などを介してアメリカのオカルティズムの影響を受けていたという点において、戦後日本に「日本のオカルティズム」というカテゴリーを指定するのであれば、そのハブ的存在であったのは確かである。しかし、ここに問題があるのは、日蓮宗の伝統的修行法を実践していた父親や、今木、山岡といった宗門とは独立した行者という事例である。こうした、既成宗教の内外における呪術師的存在は、西洋の事例には見られないものであるが、しかし、テキスト中心的な視点を脱してプラクティスという面からみれば、それらは連続しており、西洋オカルティズムのように宗教と科学の断絶という前提とはかなり異なる。「靈動」を求めてさまざまな修行法を遍歴した中野文隆を好例として、宗門、行者、精神療法家などの組織面での区別を超えて、近代日本宗教史の全体をプラクティスから見直すという作業も必要になってくるのではないか。そうした点を十分検証しなければ、西洋オカルティズムの対比や海外の研究者との意見交換という作業も難しいであろう。今後、本科研終了後も、そうした方向の研究を進め、伝統的プラクティスの近代化、政治性におけるヨーガとの比較、万教帰一と宗教会議という戦略など、いくつかのテーマを、海外の研究をつねに念頭におきつつ、さらなる研究を進めたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 吉永進一	4. 巻 46巻10号
2. 論文標題 神智学と仏教、マクガヴァンとその周辺	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 405-421
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ioannis Gaitanidis	4. 巻 17巻2号
2. 論文標題 スピリチュアル・セラピーとしてのヒプノセラピー 催眠術と民間精神療法の現代日本	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころと文化	6. 最初と最後の頁 133-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kurita Hidehiko	4. 巻 4
2. 論文標題 The Notion of Shuyo and Conceptualizing the Future of Religion at the Turn of the Twentieth Century	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Religious Studies in Japan	6. 最初と最後の頁 65-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗田英彦	4. 巻 49
2. 論文標題 革命と修養 木下尚江はなぜ静坐をしたのか？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 132-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗田英彦	4. 巻 27
2. 論文標題 南山宗教文化研究所所蔵静坐社資料 解説と目録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 研究所報	6. 最初と最後の頁 24-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉永進一	4. 巻 31
2. 論文標題 Hansei Zasshiと大拙	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 松ヶ岡文庫研究年報	6. 最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ioannis Gaitanidis	4. 巻 vol.78 no.1
2. 論文標題 More than just a photo? Aura photography in digital Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Ethnology	6. 最初と最後の頁 101-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Ioannis Gaitanidis
2. 発表標題 現代宗教と代替性 日本の事例から
3. 学会等名 東北大学国際文化研究科国際日本研究講座企画公開講演 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗田英彦
2. 発表標題 陰謀と陰謀論 太田龍における「恐怖」のポリティクス
3. 学会等名 怪異怪談研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗田英彦
2. 発表標題 The Political History of Meditation and Yoga in Japan
3. 学会等名 Routledge Handbook of Yoga and Meditation workshop (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kurita Hidehiko
2. 発表標題 "Taniguchi Masaharu's idea of Political Economy: From Spiritual Therapy to Social Reform"
3. 学会等名 15th European Association of Japanese Studies International Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kurita Hidehiko
2. 発表標題 "Political Movements and the Birth of the Japanese New Religious Movement "Seicho-no-ie"
3. 学会等名 Changing Religious Landscape in Contemporary East Asia (Hong Kong Baptist University)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗田英彦
2. 発表標題 日本型政教分離と修養 丁酉倫理会を中心に
3. 学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 栗田英彦
2. 発表標題 キリスト教・社会主義・オカルト 関口野薔薇の「神道神学」の背景 -
3. 学会等名 神智学研究会ワークショップ「アジア・仏教・神智学」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ガイタニデス ヤニス
2. 発表標題 デジタル時代におけるオーラ写真の非聖化の可能性
3. 学会等名 「宗教と社会」学会第25回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ioannis Gaitanidis
2. 発表標題 The “alien” prime minister: Hatoyama’s “occult” politics’ in panel A political history of spirituality in modern Japan: Honda Chikaatsu, Taniguchi Masaharu, and Hatoyama Yukio
3. 学会等名 15th European Association of Japanese Studies International Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ioannis Gaitanidis
2. 発表標題 Western Esotericism in Contemporary Japan: The Case of a Greek Theosophical Study Group
3. 学会等名 神智学研究会ワークショップ「アジア・仏教・神智学」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塚田穂高
2. 発表標題 戦後日本の新宗教平和運動における思想と実践
3. 学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塚田穂高
2. 発表標題 政治と宗教の話をしよう 「右傾化」から「カルト問題」まで
3. 学会等名 第54回情報文化研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ioannis Gaitanidis
2. 発表標題 *Datsu-supi*: Heretical Discourse and Spirituality in Contemporary Japan. "
3. 学会等名 Asian Studies Japan Conference, Saitama University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ioannis Gaitanidis
2. 発表標題 Criticizing spiritual prosumption from within: the case of the anti-spirituality discourse in contemporary Japan
3. 学会等名 International Society for the Sociology of Religion Bi-Annual Conference, University of Barcelona (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ガイタニデス ヤニス
2. 発表標題 異端論としての脱スピ論 - 内からのスピリチュアル批判 -
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗田英彦
2. 発表標題 近代日本における「修養」の思想と運動
3. 学会等名 2019年度日本宗教史懇話会サマーセミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉永進一
2. 発表標題 催眠術と仏教
3. 学会等名 Search Results Web results 第27回日本近代仏教史研究会研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 塚田穂高	4. 発行年 2017年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 196ページ中、76-84ページを執筆。
3. 書名 大谷栄一・川又俊則・猪瀬優理編『基礎ゼミ 宗教学』	

1. 著者名 吉永進一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 373ページ中、59-75ページを執筆。
3. 書名 赤松徹真編『『反省会雑誌』とその周辺』	

1. 著者名 吉永進一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 420ページ中、3-23ページを執筆。
3. 書名 栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編『近現代日本の民間精神療法』	

1. 著者名 吉永進一・栗田英彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 420ページ中、297-384ページを執筆。
3. 書名 栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編『近現代日本の民間精神療法』	

1. 著者名 栗田英彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 420ページ中、111-143ページを執筆
3. 書名 栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編 『近現代日本の民間精神療法』	

1. 著者名 塚田穂高	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 420ページ中、167-189ページを執筆
3. 書名 栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編 『近現代日本の民間精神療法』	

1. 著者名 ガイタニデス ヤニス	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 420ページ中、269-291ページを執筆
3. 書名 栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編 『近現代日本の民間精神療法』	

1. 著者名 Ioannis Gaitanidis	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 225ページ中、65-80ページを執筆
3. 書名 Fabio Rambelli (ed.), *Spirits and Animism in Contemporary Japan: The Invisible Empire*	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	栗田 英彦 (Kurita Hidehiko) (10712028)	南山大学・南山宗教文化研究所・研究員 (33917)	
研究分担者	G A I T A N I D I S I O A (Gaitanidis Ioannis) (90715856)	千葉大学・国際教養学部・助教 (12501)	
研究分担者	塚田 穂高 (Tsukada Hotaka) (40585395)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・助教 (13103)	